墨水遊覧誌

ル 4
388

春秋花庵菊塢撰

すみた川
名所古跡捷覧誌

花屋鋪蔵板

墨江天下之勝

388

丙申仲秋
黒田羽皐題

茲に幽谷の若草を出でし翁
鴨長を語らひし大日堂を出すに
なりけれ翁の風雅を書しるしたる
残す此の名流に語るをあらしめ
に雅兵のひとすにしとける漏しも
ともに兵事は比ゐるときし翁は今様に傳

しゝ絵をとしい古きをまね白らしいな
うつ是を晴れ生母の系すきとを伊のに
未ても知りくして借文能説て倍
こなりも此さハ是等の外み多くもいへ
我此集ハ昔とより指揮せ出來
あるも花屋の主人本よりしも
このみて翁の子孫とあるを流布

ゆゑにくもしくしくもみせをしかあとを是哉
を古ハ翁の志を見て花のよしあしを
の恨みも寄せて一筋ならとも思ひ
丙申仲夏西家東の所に
の風をよみて北とみそむけをと書
ふる　　　　海丹

一紀乃春もうちの秋とこそのちかの
ちよしをのこゝろは花菖蒲るまし
あはれ我こゝろまでるたにこそ一きはたえぬ
くちぢちかれ十以の隅田川乃なかの也
まことにこそ西東の川乃尾ぞぐ
はり我しき木草の千々の夜の夜冬も

つゝめてよく見えしうつあまて名ある所へ
水おほかたにてさへ人々もらしめれと
梅の花といふものあることはもとよりいふてう
しるしなされたる才の書つゝりてうま
うちむきをしへ人とふことにも名ある示の
記つ梅花の翁にかす人ゆへてるこそ也

菅家は人々梅花のくゝへと
あると名は折ふしめでたきよまゐらせおもゝの
菓子の折ふし一日花見あると
なつまて夜雲のあしたも夕暮ぬ
あさけふるきやまかれた古今ちら
まゐらせて後梅の名をさゝえし

なまくしかりなもつくれさとさくは
まなめしあれこまこくいろこつめついへ
きすいさやすしかゝとのゝし岩さこそと
えんそく岸本由流しらん

暮宿舟中釣艇
瀲灔葉撓雪洲江佳人出嶮
漁翁放魚洲岸峡中岸上掛樹
舟中左右通
瀬分深羽飛絛江枝只隊六
撃所謂磯正磨美景二難并

不用不妨綺酒峰
蓬之山与母邪難將本安古
奇雙一樹包將春妙許榮科
青探孫水江
高園接納源
大小雅連接之水四情野家

書陶々發來一盃清源地輪
擇身握叢尾松
秋之墨白川
隨舟遊嘯激風露送中宵
煙谷種世崖岩色古良攜矣
成雖足迄酒力未全消倦

題将一勝水松東觀紙
菊塢人作墨田川遊覧
誌屬序於余因書塵化紙
先是之以代跋云
戊子夏六月 萍蕪人大庭行

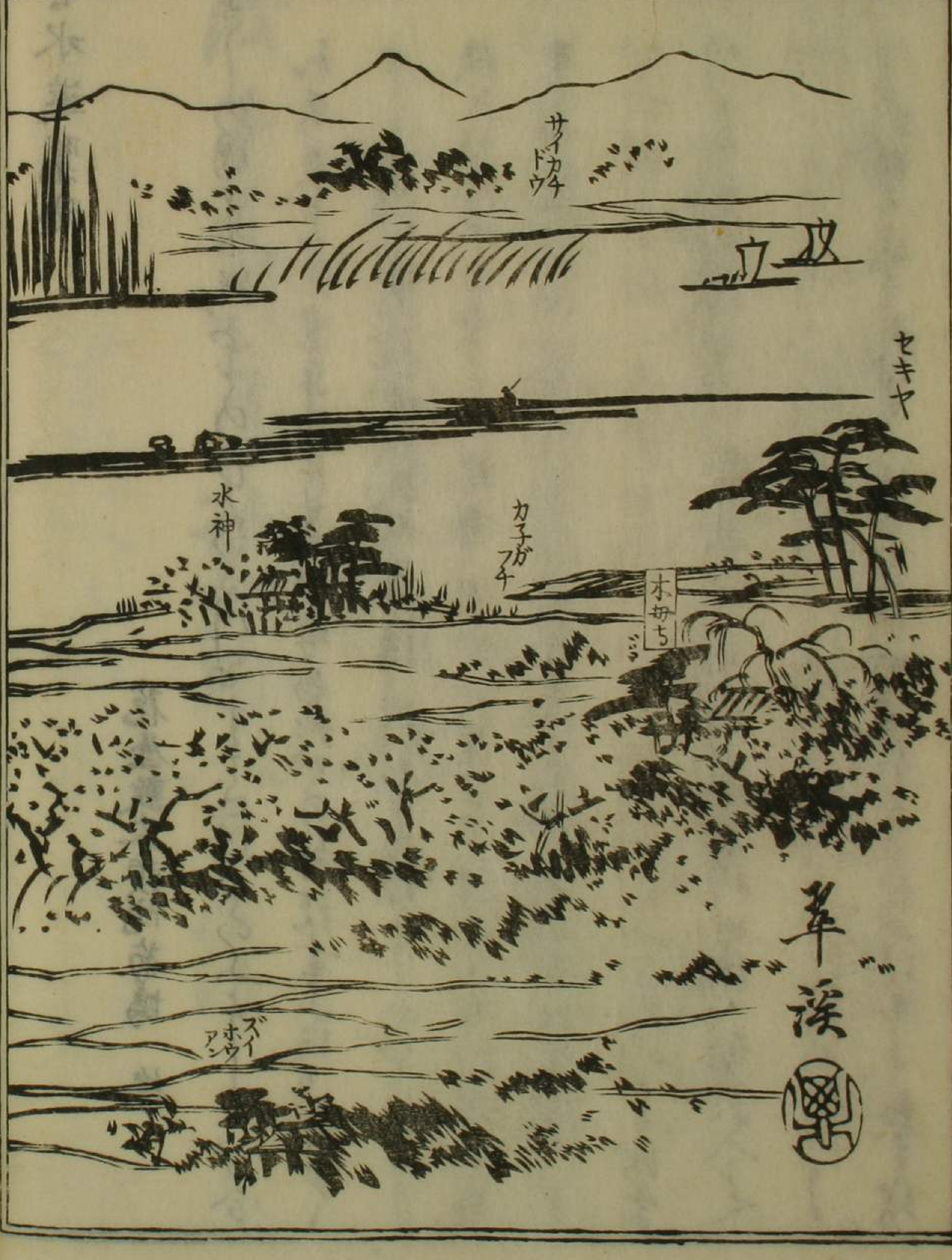
墨水遊覧誌

花屋敷菊塢　編

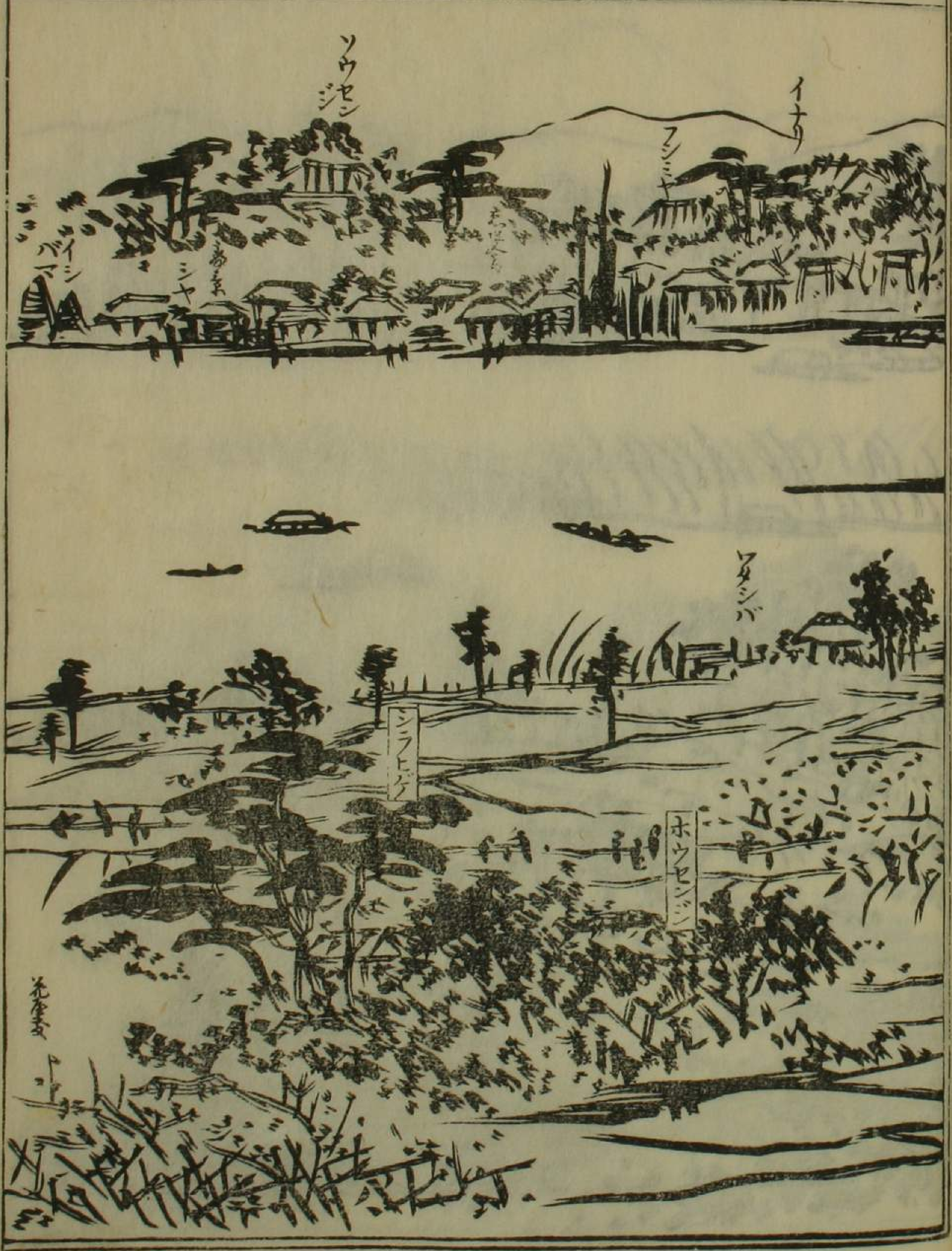
むさしの國と下総國との中なる川をすみだ川とよぶよし、古今和歌集東下り業平朝臣集、伊勢物語その外諸書に見えたり、そもそもすみだ川は武蔵国秩父郡中津川を水源として、それより秩父の諸水を合し、榛澤、男衾、大里、足立、埼玉、入間、新座、葛飾豊島の諸郡をすぎて、凡二十余里の長流なり、みなもとを荒川といふは、秩父大滝より出るゆゑなり、すみだ川よりいふは荒川より浅草川までをいふ、浅草川の末をあら川より江川の流へながれ入る之

宮戸川は名のみにて其の所つまびらかならず、此の大さん橋の辺より高札場のこなた高札場より従是南何町と書ある高札の場所まで数十歩

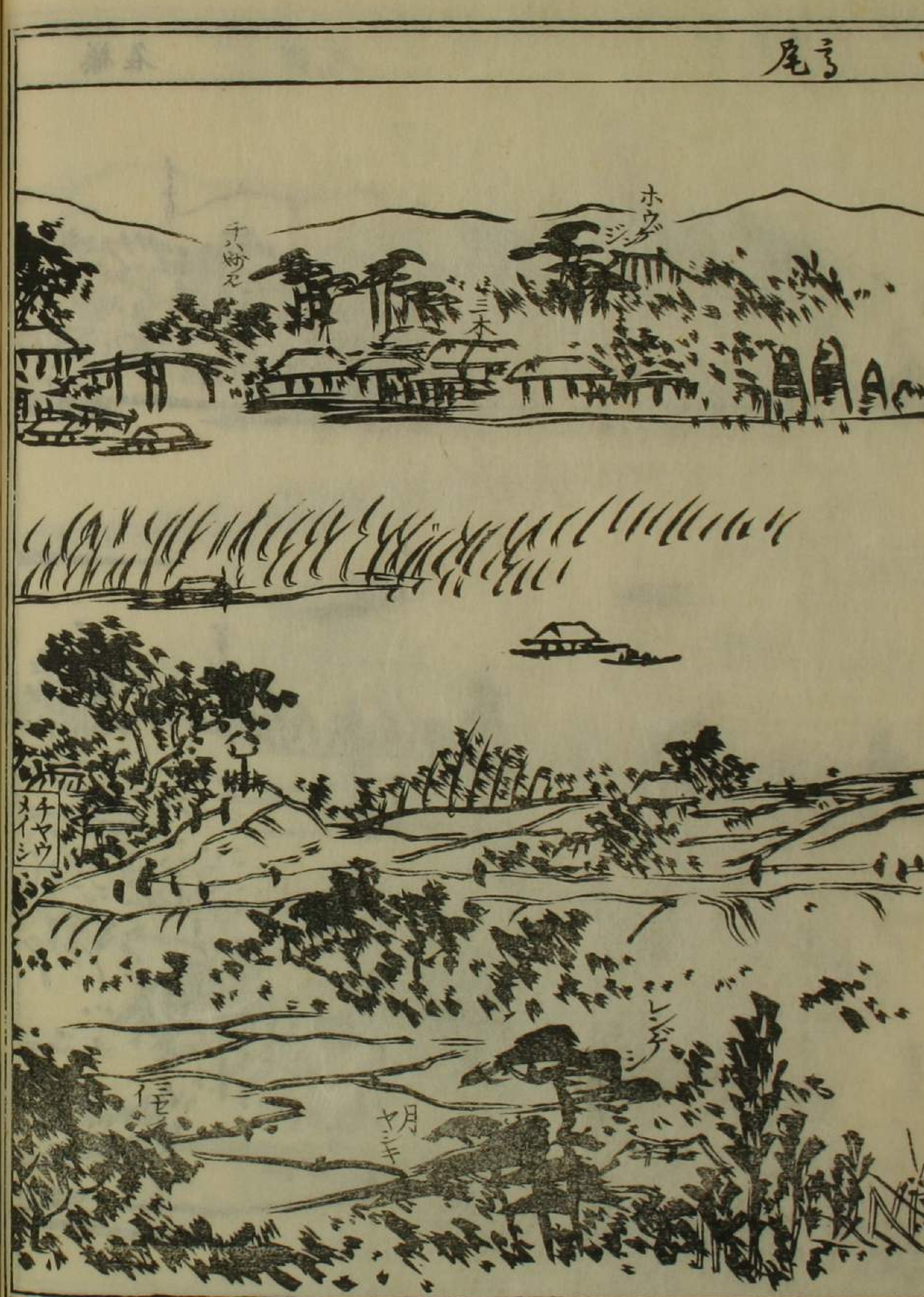
筑波　二荒　赤城


サイカチドウ
セキヤ
水神
カ子ガフチ
木母ち
ズイホウアン
華渓

榛名　秩父


ソウセンジ
イナリ
フジミヤ
イシバマ
シヤ
ワタシバ
シラヒゲ
ホウセンジ

アサクサ
マツチ
山ノシユク
花川戸
牛ノゴゼン
三メグリ
ロサン
アキバ


高尾
チヤウメイジ
レンゲジ
月ヤシキ

棲ず又是此所とすハ此所のすみだの川の端にてられて是も同じ推古天皇の御宇よりのされたるれハ此辺を三谷た川の渡とすべし此事の外にも説あまたあるし　とかや

眺望の遠山

筑波山 常陸　二荒山 下野　赤城山 上野　榛名山 同上
秩父山 武蔵　高尾山 同上　雨降山 相模　足高山 同上
箱根山 同上　富士山 駿河　以上十山あり

二荒より奥の山々しらより雪つもる冬のゆふぐれまで常木白き嶺残る緑色をことさらに鮮をあらそひ、つとめての眺望いとおもしろし。やんごとなき方の御撰集よりしてこゝにひなる人まらふすれ人の詩哥また紀ハ春秋の月花をめでうきハずみだ川のすみぐまで古跡ならざる所なし。いま名所と知りぬべきのひとつあげんハ光のあふらく見る人ゆゝしうおもへり

古今
名にし負はゞいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと　在原業平朝臣

抑ま此本哥にとられりこの外此くの勅撰家集等にすみだ川乃古歌あまたのこれるず、たゞその一二首をしるしはべる

堀川百首
すみだ川みぎはさむくのこる白露のうへにくるかぜさえてちどりこそなけ　源師頼

新勅撰
都まで人まるんせばやぬるとまもすみだ河原のゆふぐれの空　藤原俊兼

拾玉
時しあればすみだ河原の都鳥むかしの人のおも縁とをそバや　慈鎮和尚

鴨長明

家集
こゝろなくありけるものをすゞか川いさゝらちんなにおやすとよ

藤原定家卿

夫木
ゆふ霧はこえてひとりぞすゞか川家友ふねはおのがやどりや

藤原家隆卿

壬二
波ちかくなるさとのちりせすゞか川八十の瀬の名のみとも

藤原為家卿

新後拾遺
うやまりあらしと波に流るゝ川さはりてのみ人をまたせて

頓阿法師

草庵
すゞか川秋はきり深しやどりしちるやまとやよるとなる よこうりう

契沖法師

漫吟
ゆふしもやふるよさむのすゞか川ちる風さえてしらぬかぜにやどり

加茂真淵

家集
八十つなぬゆきしほの渡に角田川月のちるまで舟なくちちん

本居宣長

家集
ふねまちで橋もりしのぶすゞか川せゝらぎやすさ旅ゆくふ

橘枝直

東歌
入日路ハゆふだちすゞし名に見て汲ずすゞか川原のかぜのふかれる

橘千蔭

うけらが花
すゞか川つねよりちかくゆるまでかはらにひかるきぬ

平春海

琴後
すゞか川瀬々のいはねのかはしさまゆききぬる人やなれけん

かれはさといざこととはんみやこどりすみだ川原にたつハなしやと　加茂季鷹

静勝軒詩跋云　凡遊關左者必以見富士山過武藏野渡
隅田河登筑波山則皆誇四方觀遊之美也
又云亭曰泊船齋曰含雪云々西北有富士山有武藏野東南
有角田河有筑波山安四方之觀在卅一城也
羅山文集云武藏國角田川在武藏下總之界有鳥曰都鳥喙足
皆赤形似鴫（志義）好食蛤昔在原業平來過詠和歌

○東岸葛飾郡の部

萬葉集云可豆思加、又勝牡鹿、又勝鹿、
延喜式云下總國葛飾
和名抄云　下總國葛飾（加止志加）

万葉
小屋よりのこゝしかをとくすさそのかしこきをとふくそめしと　よみ人しらず

続後
このしろの池田のをしへのさされてたまるくはきれとつさか渡り　源俊頼朝臣

三囲稲荷　小梅村　天台宗　三囲山延命寺

田中のいなりとはいふ、むかしこゝだ此り田の畔にむかひてよびありいづくよりともなくきつねきたりて、神体を人のおそれてふごのうちにしてのちきつね出ずとなん、其角句に、ゆきをやきつねよびだすらんかしと、　遊ちごや三井寺ふかしこの神をたのんでしそしゆしだいかくもんとやしして今ふにつさんの御代

甘くりありし、又ばんとられがらうひのある時、南社の白狐の縁
をばんぜ北にまつりおきさ、さてこのうさきあひすゑ、此のごとく社へ
たてまつる事、年久しくこの店の徳之、手前南町の台の碑あり、
ゆふ言や田をあつかりの神なれバ、此南町のたゞ人の志るしあれバ、晩
此堤下白魚の名所にて、やよひ頃ハやうなきまでむ、白魚網
とりしのしむ、すべて此辺ハかゞり火をとてさつくね、漁父白魚
をとる、その景色いふばかりなし、向河岸ハ三谷堀へ入口にて吉原
がよひの遊客ハいさゝか舞を帆にてのがれて、猪牙のりこむ今戸橋と、
其角一蝶のころまでありし、隅田川をと流れの堀汁をあびが
あぶり子絵なり

蜀山人

すみだ川ながさかりハちかくりのとりかのゆかりハありやなしやと

牛御歬　本所[illegible]　九月十五日祭礼　牛嶋村　天台宗　牛宝山最勝寺

貞観二年庚辰慈覚大師勧請也、諸社根元記云、中ノ間ハ大政所牛頭
天王、素盞烏尊垂跡、東ノ間ハ八王子五男三女、西ノ間ハ稲田姫本御歬、
とあれバ、牛頭天王とそいふべきを、牛御歬といふハ、牛頭天王と姫本御歬ハ
夫婦の神なれバ、号をとりつく神号とす、王子権現相殿なりこの王子
権現ハ、清和天皇の皇子をまつる、八王子にハあらず、享保の比中
より塚出せし碑あり、左のごとし

裏

青石長四尺余
巾二尺　表ニ
釈迦画像アリ

奉造立釋迦像一軀
貞観十七丁未天三月日
法華千部
明王院

牛頭山弘福寺　牛嶋村　黄檗派　開山忌八月廿日

開山鉄牛和尚延宝年中隅田村より此所へうつす

秋葉大権現　請地村　真言宗　千葉山満願寺

千代世稲荷を敬之、法印某代不詳元亀年中草創といふ

秋葉の名あるハ、すべて此辺を向島といふ

料理茶屋あり　大七　むさしや　この外いろ〳〵

弁財天　牛島村　天台宗　宝寿山長命寺

寛永の頃、御鷹狩なりし時、にはかに御虫痛あらせたまひ、当寺へ入御ましまして、井之の霊泉水をたてまつられしに、たちまち御平愈ましましければ、宝樹山常泉寺の旧号を、あらためさせられ、宝寿山長命寺と名付させたまひ、境内の公役ことごとく免除したまひし

とあん

此ちの茶家堤のよりすミだ川の風景第一之　千種庵諸持

すミだ川　夜ざくらしてハ　くるまちハ　長命ちをもとるべかりけり

境内の竹柏(なぎ)の大樹ハ、元禄年中、大久保主水ぬし、鎌倉扇ヶ谷より、神木ニ入持来り、此所へ移植しよしを、宝暦年中ニしるせし、碑の文字のこりすくなかりしとて、文政六年、播州前代君、書改めらるし碑あり

芭蕉堂　宝暦年中、祇徳建立ありて、自画の肖像となし、能阿弥真して、世にいふ長命寺の芭蕉堂これなり

厄除女人済度弘法大師　寺島村　真言宗　清滝山蓮花寺

弘法大師真筆の画像ありて、其絵甚妙なる尊像也、開山小堀宗雲時ち
時親の兄、經時入道して、法名日大僧正親助といふ、弘安三年八月
二十三日よりあり、ちこ島へうつる、寺ち大師堂ハ、権大僧都法印、無元
の再建なり

松の隠居　ちこ島村　二代目　植木屋伝五郎

松ハ為百木之長、霜雪而不凋、歴千年而不殞、甚花色黄而多香、根下有伏苓、為仙家服食之薬、園中ニ花木奇石を以て、山水の景をつくる、又梅門、松門、槙木門あり、家ハ是まで知らぬし、異形の珍木の名品之

菊の隠居　同　三代目　植木屋　季平

この菊の隠居ハ文化ごろ川原より子の好かし、ちこ島村へ隠居して菊をつくりたのしみて云く、陶淵明獨愛菊　周茂叔の云く、菊ハ

花の隠逸なる人のよろこびしも今の世ハ花植木の縁をかぎりしごとく、寒く殊に花を植溜しおきて名木奇花をあつめ、庭をつくりまうけ茶のやうに帰して、上席料理屋を渡世とす、風流なる献立をもて日々来りてあそんじゆうす、不断翁の名称く

梅の隠居　花屋安又郎　梅やしきとも云　百姓平二志

つくる梅の始ハ、應神天皇十六年、百済国王仁吉師、難波津へ持渡りし梅にて、文化年中まで凡二千年の星霜を経たり、梅ハ出於羅浮庾嶺、蓋梅ハ為天下尤物、無論智愚賢不肖、莫不慕其香韻而称其清高、范石湖有梅譜、袁豊歎曰、氷姿玉骨、世外佳人、但恨無傾城笑耳　唐ハ西湖、日本ハ墨田、寺島与孤山、林和靖子傲て梅株三百六十株、梅樹其実をひさぐ以て十余人の口を糊すといへく

園中ハ山野の月色をうつし、春夏秋冬の花卉草木、花一日あり
一苑にあつめざるハなし、此外詩經百家の草木、菜蔬を護ひ穀菽あり
秋野七草園中第一の景物なり
先ころしろのさくらに、梅園をひらきしにはじめ、正月園中に
小松をうゑ思ひ寄る、子日の宴をうつしたり、文人こぞりて、つど
らせるもまたあり、その頃に

松しげりて雪の相よつて、ふるよりハ春のこころをおぼえ侍りけり　子倉

うゑさせバつざそよそん先やどの松にひとつなりけるを　夾洲

色のをちこちの小松ハ雅なりひろ〳〵白ふ梅がく　自寛

先大人うちの心ねぐず、このむしろにつどひせらる人おほかれぞ、
ひまりふこちくなれバ、その名のこゝをながく、いつれの年文ハいふ

よらせり、その人々ハ

有年　子枝子　正臣　子古　子幹　平荷　雄風
勢羆　鯤絃　真澄　玄蜀　景廣　寅臣　寛光

こなたにて十　よもの客沈よりあまり

やがてのつむしのむちのこるをり折バ、のくこそなかめ梅の花園　子一の

さる月中二日ハまた折やしこさをおもひて

さ折きん春をもちまゐるはくされの面の名ハ妙に梅の下陰　さ彩

菊月のもしめ菊やしさにまつりて

人ごころよよふ秋野をあはれこころふまちひまつまゐて　やどの菊もれ　内藤子

文化のもじめ川上景家庵なびし来和肖と池田の君を、天神奉
招待し、菊を愛じするなれバ

ひやゝかで寝るやこゝろのうれやしさ　不白

是日翁の来りて和尚曰、未中若、若中未と聞て
我ひと夜のりしに入相のかねにいさゝかちかく咏めと書給ひし
一句、ふやしきの竹をとまりぬ

丙戌のとし卯月七日友どちと誘れ、すみだ川にあそび
帰りのちに、いざみやこ筆をとりぬ

萬松山下　こゝ子

もれそいふなぎりしとよ名くやつの葉さくひの女郎花のすみだ川原で
なつかしくふんの手兄バすみだ川いやさきの鳥の名をたしかめず
こゝ子ハ、紫雪大姉也、孤峯菴和尚之、萬松山ハ、深川東海寺乃
山号なり

ことしをれさりしふたまりて　蜀山人
玉にちかがえてまし梅のふきたれバうぐよの声やひとのみまきん

題菊塢所居　詩佛老人

江畔移家得、不嫌生計貧、栽梅三百本、翻引十餘人、烏帽堪為画、藍衫太稱身、餘地君無惜、吾来欲卜隣

白髭大明神　寺島村鎮守　九月十六日祭礼

慈恵大師作の木像之、天暦年中勧請之、近国近在ヲ此社の氏子之
○白髭の入江、名高の名所之、むかしハ宮居がちの名所なりけり、
菊月もしかより、田に眺れバ、かんやくのすゝきとあけて人をも
なぞれず、ひるひハ緑なり、あるひハ　さりつゝ、ほびくるふさまを後の一つ之

白髭山　最蔵院

すゞし川 夕の
ゑ秋 数ゟすゝきて
山中 幽谷といへども
此夕ハおもはず
鶉 こう 鳴る
啄木鳥(よぶこどり) 穀 うつこと 傘とり
ひしくひ せきれい
鴫 鳴る 鷸(むくどり) むくちよ
ほとゝぎす 人
此鳥もちひなて多し こずゑより手をりて日中も鳴
くひな 小鳥
ましこ もず
ひわじら さ鷺

人たき この文字
まつたけ ごみ鷺
う ときさ
しぎ ふとり
魚類
鯉 ます 鮭魚
くるぎ すゞき
鯖 くるぐい
いな たなご ふな ぼら ちや 紫草の魚び わかれ
小鳥類 鷺 雁 こがらどり うそ うき雉 こがら よし切 志じうから
みそさゞい ひのどり ぬず ちやぼ やまどり ひよどり
ほとゝぎす うずら ほろほろ こまつ鳥 鵯くる ひハ 鶸
虫類 ほたる くのむし うぐひす せゝ ごみむし いなご すゞむし
くつわむし 松虫 きりぎりす こおろぎ くつわ

榛園芽の云、和名抄に、葛飾郡八島郷とあるハ、此辺のことなるべしと云
葉ずるに　大島　五本松の北の方、隆江の東　炮烙嶋　小名木川の南、砂村にあり
六沠嶋　同砂村にあり　寺嶋　本田新田の南村あり　柳島　明暦以前ハ此の四両院の辺まで、柳嶋出村といひしとぞ
牛嶋　本所源森橋より北、石原、中之郷、小梅、北寺辺すでをいふ、　以上六島なり、此外に二島の名
なりて八島とハいひしなるべし、八ハあまたの意にて、八つにかぎらず、八ハ弥の意にて
て、島数おほきさゆゑの名なるべし、
白鬚の社の東北の隅の八重垣ハ元禄年中に建て文化年中
隅田川焉翁ト様葉嶋と共明神へ奉納に建たるなり

警不動明王　寺嶋村　禅宗　清河山法泉寺

新田義貞の守本尊にて、脇屋義助勧請すといふ、
境の碑に、上古葛西之清重居士開基正高となり、

此辺すべて松樹の名所にて、実梅より出たるものハ、景色殊に勝れ
て、うつくしく、かつ大和本草に、当所の菜、小松菜、日本一の名味なりと
いふ、又ハ当島村の菜、亀戸之その外、請地村の友菜、小梅村の蕪菜、出羽
ち島の茄子、隅田村の芋、浅草川の蜆、向島の鯉、三囲下の白魚いづれ
も名物なり、
小梅村と戸町、亀戸村にて製し、亀の名物にて、又ち島出村、隅田村の百姓よりなし
ほうろく火鉢のすやきを製し、賣ひろむることを年久し、すごやさ
といふ、また近来をよそ乾山流の陶器を製し、賣ひろむ、都ての茶会
なるひとのうつさあるひてお茶をたしなまんハ、すだ川やきとのふすべて此辺の陶器ハ、
あんらうごの手ふるく製す

隅田堤の桜

山桜の一種にて、八重の咲まじれるは、江戸第一花の名所なく、
此堤は、熊谷の堤まで、十六里二十丁、堤つゞきて名ある築立しとぞ、
やよひも中の五日ごろより、ちりくる花にちりかゝる花にありぬと叟
く母をてすみだ川へまゐりしよめる、

あはれ我の子花

すみだ川つゝみの花に人あらばさくら世にしれぬ花のさかましを

梅柳山木母寺　隅田村　天台宗

本尊は佛堂、慈智御作を安置す、境内禅林岸にし
ふるくより梅若といふ大樹あり、ふるちひさくてかたはら呉林にまぎれ、此
まぎらしき名木之、

梅若丸塚

本堂のうしろにあり、柳を植、むかしの柳ちられて、株のこ
れり、今忠右衛門といへる者の木の下に古木となりしかり、
佛云、人皇六十五代花山院、寛和二年三月十五日、都北白河の
吉田少将惟房の子梅若丸、人商人にかどはされ、陸奥へ下る
とて此所まで来りしに、長途のつかれにて病のゆゑかうしをかれ
人商人のかどはかし者なくうちすてけるが、所の
人ゝいたはり介抱すれども、すでに末期におよびて、かなしく、吾うらんあと
まもりて此みちのべにつかをまいらせ、しるしに柳をうゑてくれよと、かくて
まかりしかば、里人いとあはれとて、寛和二年より今文政十一年まで八百四十二年
の年霜を経たり、此ところ角田川といふ名高き塚にてあり、東岳竹宗匠の記
ありとぞ、又梅花無盡藏に云く　前略　隅田ノ春色浪如花、鳥若知

都我細問自注　都鳥隅田之故事也、河辺有柳樹蓋吉田之子、梅
若丸墓所也、其母北白河人　廻国雑記に云、このくて すみだ川の
ほとりにいたりく、ふねしさのよううく披講などしていにしへの塚
のすがた、びのまれさとのごとくにおぼえて、古塚のかたはらの
すみだ川きしわたりてまねく袖のみか、又雙生角田川と云まで、
これは年号の證之
八月十五夜すみだ川にまかりて
烏丸光広公
黄葉集
みなひとやとしちとせの秋にまたくすみだ川原の月を見んとは
いくちとせかたらばごに月のくもりなければ
同じく

門
わかなますこしもみなのすみだ川をかけてひつこあるなるたどるべきさ
近衛三藐院信尹公
本集 歌紀行歌
おもくさば殺出こし ことやこゝろよりあつめてをとめなりし哉
歌入
同じく
まうでんとてむさしの国の江戸といふ所の東のすみだ川あたり
所自筆にてかゝる柳のもとを折りてひ年としらく
木母寺と書して、寺門の額これ也、
案ずるに、梅若丸のこと、こゝに委く記したりといへども、すでに梅若丸
が墓、廻国雑記の書、されば三百四十年におよべり、その上いふ
しへのすがたなどはのこるをみれば、そのいふすでに古塚のおもむ
きをふくりしにより家あらのよくみえたり、

柳のもとの小祠ハ山王社なり、すなはち梅若丸をまつるといふ、
毎年三月十五日、祭礼として念誦経修す、江戸砂子に云、享保十
二年、梅若丸七百五十年忌、開帳ありしに、その後追々
寄附の什物、梅若丸の扇、同画像、母妙亀尼の画像、探幽安信等
三幅一対之縁起絵、書物等を拝せしむ、

境内桜樹五十株　文化年中東納小室鳩うゑおかる之

浅草庵市人

木母寺におもひ出して名のり江戸の人ハゆかりのすみれつむらく
すみだ川まで

文元集
あはれそのみたるかなしき糸子の舞　三角

木母寺に昔詠今なりもとの月　円

水神

境内料理屋　うゑきや　武蔵や　はつねや

隅田村　六月十五日祭礼　隅田村　隅田山多門寺持

隅田村惣鎮守なり、この隅田村、むかし拝せ、かゝし場の子新町と
いひし、其沱なりて時々人をあやまちしに、かの神の功力によりて村民
安穏の思ひをなせりといふ、　七の名高なり

この社まく繁昌すとて　元木網
名とりハ夜をさかつすみだ川ながれわたりによりうかちかな
かの社の傍よりの根ハ本の縁のふかく愛之

須田渡　隅を田にせしところゆゑに隅田村と云

源

文木
ゆかりまですごのわたりハさくらさかり舟人よぶふ舞　ここにあり

此歌おもむき其後云、左為すずのこハひのしくもあらねば、すゞのわたり
とよみけるぞ、あはれなることちするにや、これハ業平朝臣、いざことゝハ
んとよみしハ、かれこれこのれひとつなるまじけれどころく、すみだ川乃
ほとりにおいて、わくとぞのなかよし、それに思ひそめくおぼゆる
にやあらん云々

隅田川に橋を懸わたされし事

平家物語十一巻、源平盛衰記廿一巻、義経記三之巻、鎌倉大草
紙にもみえたり、されど本文には、上総介淳入道、角田川之橋を
つくり、大軍をわたせしなり、橋を家老男女に命じて渡橋を撤しと
記したれバ、この頃へ橋をとりしハ、数度の事と

藤原光俊紀長

狂歌六帖
すみだ川むかしハきかず今こそハ見をかくさるゝの無之なり
このころハ、寛元々年、荒高社にまうでけるが、すみだ川のほとりをわたらん
れバ、舟渡りとぞいふなりしをわたしかれバとなり
江戸砂子云、むかし此辺に七橋なり、武蔵に続て大なる七入ありて、
或ハ橋を懸なりけりしゆゑに今ハなくに橋杭残りなりと云、世俗
なりやありあるかなし、いつの頃にや、つまびらかならず
橋のなかばハ、大なる榊の處より二三丁下のかたにて、文政辰年
水命によりて橋杭をぬきさせられしハ七八年なりとのことにて、里人も
よく見たりて云くハ、水底にまで生立ちりて上ハ朽て下ハ埋木のごとし、
その大中にある杭ハ、踏をさへ、二抱への母へむすび、材甚さ彼のさしわたしの
ちまでぬきさせられし とぞ

石濵、砂尾も昔の古名、或ハ橋場とも或る浅茅原も、此時ハ真言宗 今ハ浄土宗なり 旧地
なれバ此所也、まこと隅田村の、今門も、為門也、白鬚も、このときハ天台宗 今ハ黄檗宗
旧地此所之、されバ今門も縁起に、須田の橋場を新町となりすれバ
橋場の名、東西に有、梅若ハ陸奥街道の中心也、民家もなつまりたるし
ところ、文治の年頼朝公、泰衡征伐の時、渋谷の鉄砲も、石濵の祢宜
まうでて祈ひ、又すぐ村をすぎて、前の村の八幡宮へ参でまつりしと云
此南東北にての八幡宮を、八幡太郎義家朝臣、奥州征伐のときも
勧請とつふよう、頼朝公祈願あり、浅茅の浅造営なりしとぞ
江戸砂子に云、鐘ずりの世の古名有り、義家朝臣の鐘ふるを手ずから、
ふち上より洗足の古事あれど、その實つまびらかならず

鐘が淵

鐘の名あるなり

奥州海道の旧道通りにて、隅田村の新町より、用村曽門
昔ハ亀井戸へわつるその時、浜やまつく鐘の淵へ落たとつふやまさる石濵
浅茅原の鐘楼、くずれ入るといふ、あるいは落ましてつまびらかならず、浅さ
なふくるす中の鐘に絡なるべし

関屋の里

一説に せきやの里ハ足立郡の内といふ

名寄に下総　松葉集に下総或ハ武蔵と注す

古縁事物　江戸名所に関屋あり　すみだ川の東石原と隅田との間にあり

隅田川考に云、関屋の里ハすみだ川の辺りにあるといふ、論あれど
詳しくそのところをしらず、江戸古図といふものニハ、隅田川
より東の方に、せきやと書し所あり いまハ木母寺の辺と関屋の里
といへり、
いにしへのすみだ川ほとりにありしならば せきやのさとふ

やどりかりし、その頃書に云、康元々年九月、すみだ川乃
渡まで、このわたりのよみすみ川のなかしふつきて、里のならをたづねれ
バ、せきやの里とぞ申す、おまへ御船大きくとどまりかりき、これ
光俊ハ、光陸国うしまの社にまいられるのすみだ川の渡りを
こえられたりし時のこととく
今木母寺なる所に菜畑木母ち　うきがちとも云べし、此所に古ハ関屋
の里といふなりしとぞ、今ある赤松数樹ハ、そのころ
の名残りとて、植させ給ひしと云また豆ヶ立郷、牛田の辺に関屋
天神といふ古跡あり、関屋の里といふ地ありといふ、此関屋の天神ハ、
天満宮の御自筆の像をまつりし神也、持主ハ当処のまん宿、天正
庚辰の春古跡出来、古き八子子菜の末葉、石出帯刀、石出掃部ハよしつね　ほか
うまれしもの

子孫之ハ今にそを伝ふとなんいふ

思光法師門跡すみだ川にて御経のとき

つくばさの名に関屋のさとにたちやすみだ川原のなみぞおもふ

千葉介古城跡

木母寺のほとりや此川のつづきに、上千葉村、下千葉村といふあり、これハ
下総国なる千葉介が出城の跡にて、いまも村の名となれり、千葉介ハ治承
の頃の兵乱より、その後数代ありしが、いづれの時代にこぼちたる城にや
ありけん、又小岩谷といふ処より九曜の紋の古瓦出る、千葉介が城跡
といふ、九曜ハ千葉が紋なりとぞ

隅田川古戦場の事

或書に云、天文三年ある北門の内、内厨之部　将軍、隅田川に

出陣すといふ。東鑑に云、治承四年十二月廿日、武衛相二-具千葉常胤・廣
常等之舟一、濟二太井隅田両河一、精兵及二三萬餘騎一、赴二武蔵国一云々。源平
盛衰記に云、兵衛佐頼朝は、平家の軍兵東国へ下向のよし聞給ひ、
武蔵と下総のさかひなる、隅田河の辺に陣をとりて、国々の兵をまねかれしと
いふ。義経記に云、伊豆こそ、ふるさとなれ、すんなりとちこえていらせたまひつきたまひ
ける云々。小条九代記に云、上総権介廣常は、両国の軍勢二万余騎を引
率し、隅田川の辺に参向す。隅田川をわたりて、武蔵国に入らせ給へば、
畠山、葛西、足立の人々もはせ参りけり。又云、文治五年七月十九日、頼朝公
奥州追伐の首途し給ふ。千葉介常胤・八田右衛門尉知家は、東海道の
大将として、常陸下総両国の勢を率して、宇太行方を経て、岩崎より
隅田川のほとりを渡り給ふと云々。太平記に云、新田足利合戦に小手
指原より石濱まで、坂東勢すでに江戸十郎をも所々にておひ付ける、将軍
石濱をお渡りなされ云々。本朝通鑑後編廿巻に永禄六年正月の条下に、北条氏康
与里見義弘太田三楽入道と武州国府台に戦ふ、国府台は古城跡有、

西岸豊島郡の部

石濱江戸太郎重長古城跡

太田道灌古城跡

東鑑に云、坂東の武者江戸太郎重長の古城、石濱にありしよし見えたれども
未だつまびらかならず。重長は秩父の苗裔にして、葛西三郎清重が一族なり。世に坂東の
武者といふ。江戸志に云、重長が家を継ぎてのところを重長といふ。今大将頼朝天下
城をとる。先づ下総国より武蔵を討さんと、房総国を催促ありて、奥州勝ちなば、隅田川をわたりて、義経
山の手ともに安宅をとまで、重長が家とも称す、江戸太郎重長これをうけたまはり、継ぎたる

よし亀山稲荷の社絶ぬる由にて、さくら田左衛門大夫故笑入道隣の
居城なりしよしいひつたふれども、そのあとさだかならず、梅花無盡蔵に云
開窓則角田河在東　玉樹香云　後左衛門尉の居とき、其縁の北江戸
のさくら田の入道入道ちかくゐ東ふのぼりしとき、やがて内裏へまゐりければ、
入道をすみだ川の月はいかにとたづねさせ給ふに、きみ絶て根をみせける、そて
めて歌よみのくだよくこそたりぬらんと召されければ、こうしてさりて　としふれと
やさしうおもほし、このさくり、すみだ川のほとりにやどりあれども、ふしとなりて　なり
られハ、などたゞの名あらず　むさしのゝ末のゆかしさしらで
こゝろさその寺などあるなど御製をくだしたまひければ、入道
そふありにしくこうしてさりて、今ろのみやうがこの事なすべからず
とやがてよろこびてまかり出ける

すべてむかしなれば、あまたの年暦を経ぬれば、せうつり物かはりて、
倭漢桑田の変たとへんかたあらず、ところどころ六補じがたきこと多く

朝日神明宮　石濱　神主　鈴木左部

聖武天皇神亀元年甲子九月十一日勅使をもて関八州の諸氏に
給ひて社殿をつくられけりとぞ、建久正治の頃をかりてちんじゆせり
しそ。千葉守が歌あまた下ぞ給ひし、稲く寄附す、其後そのときは
奥州の名跡なども云つたへ
社内に鴫先生丸隅田津　二首碑あり、先生曰、太田左渡、語余五山乃
僧とつれすみだ川に船をうかべ、吟詠せしを、万里漆桶居士が云
おなじくこの世なり

真崎稲荷　千葉胤内の守護神なりしと云　神明の摂地

料理茶屋

甲子や　つるや　川口

此辺に八百善が庭あり、料理通といふ本をあらはしたる者なり

渡場

石浜とすさき村との渡也　俗に隅田の渡と云

しばしとて我わたしやこゝろ　其角

いざのぼれ嵯峨の鮎くひに都鳥　貞室

手渡りえぬや隅田川水の流し程　嵐雪

砂尾山橋場寺

石浜　天台宗　橋場寺一の由来と云

本尊は不動明王、良弁僧正の作、又薬師如来を安置す、恵心僧都の作、

これは砂尾の長者の念持仏にて天正の頃の旧地は砂尾の瑞とて今さい

ち堂跡と云此辺の田畑すべてさいち串と云、この砂尾長者の事は、

小田原北条家臣張状、高郎氏宗陸の家臣、小田原に宗実あり、是今法名也、

寺にあり、永正のころより永楽銭の時代也

此辺坊売の名主なる田の下を一尺五寸ほど堀入れば、かきがらの如きもの有り深さ又

尺余の内のことごとくかはらけくだけしを見出すに、それより此所を高との所とす、

土中に多く、しかしそれよりゆゑに橋場の所ありとしてきたりしに、ちひさくひらける

し然れ共あまり深く有し古くより又土中に小させんと堀のことに有

て多くしあれば、このごとくなりつきとのこと

按ずるに阿育王の宝鐸を鋳、まさに八万四千の宝塔を四方に頒布せし、

その末なるべし、この瓦坊の売言地中に沈埋するをみれば、これは阿育王塔の

銘をもつく也

また此辺は、やり場とも云、土中より小判石出じおちると申しへし、

それ目名に石だちの名なりといふ

瀾亭　　石濱　川口六右の家にて

あるのころ吾も中に尾の旧家せうてふえるに、経たる八条図書のたちしに、はなはだ一章に、浅草川をさかのぼりて、堤より出島とこころざされる、今戸と云處に、ひとりの隠士あり、近ごろ難義なく、黄葉六十種の薪なるにやつれしをもてあそび、滑稽の風雅を好む　罪　世と称りけり筆者蛇の三味線はなく、ふるの小板を焼て薪をたへ世るとぞく

翁日高生

うりそめにありあすまでのゆふだちかれ　蘂右

かち井とちてさてしはくさき春やあくの色　蘂松

いつの日のあい日にふるくなりけるや、おのれ孝人といひし此の句よろしとなるに、まひかを僕の義おぼえよくて、三味より義経く送りしと云、識ア川しのましきよし尾今にありやと問ふに、云ゑほしげく、蘂松女子にはよせうの屋ふくふてあそびけれし、浅草の因とや尾八甘の故、瀾亭まで今に殘年すとぞく

妙亀山總泉寺　　石濱　曹洞宗

開基学宗和尚中興寄、拓武里北條氏に属す、亀乱、来亀乱之

法名　總泉寺殿長山昌徹大居士　弘治二丁巳年十一月八日

春常院殿貞心居士　千葉介たる亂碑

信應浄安禅定門　宇津宮弥三郎碑　弘安延治年号なり

信浄禅定門

塔頭　妙亀庵　鏡池庵　松吟庵　櫟峰庵

浅茅が原　うばが池　妙亀尼墓

いづれも紀氏ちかの門弟なり　四園耕苑子云、浅黄がちなるくらゐまで
人めさくられてさびしきゆふまぐれなぎさがちらの霧をもあげつゝ、
此方の岸の梢に、鷲鷺の巣をかけたるさまは、本色気象のすむ木すたり

芳宜園翁旧菴　　石濱中江

去月廿日なかより、秋のなごひのあつらしくて濱のすみだ川のほとり、
石なる岸のいほりにものさく人々に、去暁の月のなごり給ひて、芳宜なる白露なちなる
残くさまも茂がら背に乗るものから、ころも雨をはらふ白き人、ちかくより
あはれは深かりける、まよりここや宿る、ほりあれば、此ところに近く
て、のきのしづくのそうつ川音をもまなり、まがきの蘇の下葉いろ
つきたるがほろくとちるもなかれあり、その虫のこゑもうらぐくよる
かくてくだるのごとくあるあは、露の置きさ、すさくつろひて、かのらうび、

らうさあるる秋なるにこそ、雨のなごひそしかうりられ、そとの一すぢは
はし、ひく岸のよましらでとまちにふ雨の色にまぎれいりて、わきに
出ありつ、これは多との秩父の山のすしろのおちあるあたん、うちむきの上
岸の榛原のふこさ墨のごとくあるが中に、柿のさまくなるがさすが
りほのぐのふるえくそのひおくよりおちさつつゐのうゑわたるあり、
つくるのをちあるる梢はやうくまくすぐみまくかさなちつらんごくがとし
もけるさまにて、あびるねらぶりとのこゑぞえ出る、あてうしこまりかうす
のとびもしく、稲ぐらの庭の、つむちおとぐに村さ出て川の畔のまへよ
折りえばこきごのむれまさく、よう弦面にくのぐるをかし、ようの畔より我
士のうのさきて、桙まいくごのよにまてさく、其のれさうむることさそて、のふと
あるぐまく去り、つぐいはうのまふくあぶれもりもきづろしやうりあり、

なほさしやらねバ犬がほゆるこゑくるへり人のやがて垣をたゝく
さ庵は絶ゆるなく然さり、すべてひと目のうちにつくさるゝより、ふきおろす
松まへバ沖よりも風の音ひさしきしの本立は、ちさうくゝは、ある八
ひろくされ、あるもうくれるくかざりあさびのちゝる系に藪ひらくんゆう
にほぼ面るもくりにえたり、このくそやゆふぐれちのく有りけバ村々の
ちのが稼ぐるにむかふ、又の一つ二つ漁りけるど、えいたんるは、
らればそくに数けるのものことほどろく蹄りて川をひ小田はいたく
ゑるまゝり然郎の庇火のえ、海人のいさりともいふ夜く、かすのふるえ
やるむにたのまれあり、

秋かなくこそあをぼかなすゞ川にぶすゞさのすさびなるらん

こちぞれのまこの

静景舎

石濱中径

ゆたかのちみち居れ、すゞしうこゝろちゝるおりから岸のやなぎのなれつゝ、蝉のこゑしづかなり。いづみ(水)のこゝろちしげく、ござれ、橋場はとんと大和水とゞ、ぼんやりとさうふをさらくふかぶかしうつねとぞ見ところがらよく、しのぶしるれバ

よる月にそ見ながゞよそりすゝご川　康交記

飯舎山法源寺

石濱　浄土宗

開山大僧都智海大同元年丙戌三月十四日寂七十九才砂尾石濱道場

開基と石塔あり、此いうち堂より北の處へ引うつさるとかや

梶原祖鎌倉権太夫景道の碑　延久二庚辰年十月廿三日

藤原朝臣四ツ辻有理卿の碑　延暦八乙巳年六月廿七日

三尊弥陀の碑　康元二年　この外何人のたてしならんや古碑あまたあり　中興開基檀誉上人増上寺二世の上人なりといふ、両菱実盛の石塔あり、元来ハ古碑にて斯搨本を残しおくべし、碑のうしろへ後に文字をほりしなるらん歟

北辰妙見大菩薩　山谷町　法華宗　千葉山安盛寺

開山開基ハ、千葉介胤重子安盛、下総千葉北山谷より、寛文元年に此ところへうつる、法名　安立院日好上人

此尊像ハ千葉家累代の守護神にて、延暦年中伝教大師作へ、霊験あらたにして佐利益をて千葉合戦をまもらくなるべし

今戸八幡　八月十五日祭礼　今戸町　天台宗　八幡山松林院

康平六年勧請　相州鶴が岡と同社なり

此辺瓦師あり、今戸風炉、火入をはじめとし、いかなるものもやきて名物也、

料理茶屋　玉庄　金波楼

白山権現　新丁のうちにあり新丁ハ橋場村之

弾左衛門先祖ハ、頼朝公より長吏以下支配すべき証文下さる、天正の頃日本橋室町に住す、御入国の節ハ武州府中まで罷出、猿楽のことハ上元のごとく命ぜらるゝと云、その後此所へうつる

又日蓮上人説の口伝鈔のことあり、霊夢に出しなりと云、今聖人真筆の法花経五の巻、所持せり、毎年六月、虫干の節、諸人に拝せしむ

真土山聖天宮　天台宗　金竜山本龍院

萬葉集之　まつち山ゆふこえゆきていほさきのすみた川原にひとりかもねん　弁基　このうたの真土山ハ、むかしより大和、紀伊、駿河、下総の

続くなりて一定しがたし、されど此山をまつち山といふ事は、すでに古し
久しきことにて、しるし是非をさだむるにあらず。四国難苑といふ
南面の古寺は浅草寺といへる、十一面観音にておはします、されば其
仏をまつりしるにあらん、其縁の名所どもおほく、かの待乳の
中に古き山といふ名あるまで、いつまれる名をもたるまぢの
まつちの山は名のみさぞきぬらん　志どれてよつひよしだ女すり川ち山
おち葉をとさとつゞらしぐれて　このごとく、すでに文明の頃名所
となりしは、ほど有より、真土山の名ぞさびしくなり、げにまつち山へその後
聖天をあがめ世にしられたれば、今はまつち山聖天とて霊験あらたなる
ものとぞきこゆの事也
待乳山の社頭にて雨をしのぎて

玄峰集
まつち墨にあらのぞきぬほとゝぎす　嵐雪
寛文のころ、戸田恭光入道茂睡といへる人のいとなみし碑なり
法然上人六字名号碑なり　経書の一里塚の下と云

山の宿

まつち山の下より西へ行く、中むかしは、奥州街道にて、泊り客お
どなりし由なれば、山の宿の名ありと
いふ説、一ツ家の古跡あり、すなはち浅茅が原の地中なる
姥が池と云、むかしこゝに、ひとりの老母ありて、旅人をとゞめ
石の枕にてうちころせるよし、よく人のしるところなれど、石にそれ
しるす、これすなはち浅茅ちぎ　といひし、是これなり、その因縁有るべし、
このちの本堂なるは仏にて、大進坊法蔵寛永の頃検校と云人
我ために、なる紀、経あげて供養しかへりしより、一人の弟子、此地、
勝田検校なり

よく見ればゞ一人あり、又わすてゝこゝろざしはあさく二人に、孫右衛
門てられば命をまもりぬこれより、つれの女の孫兵衛といふ一つの呉
像を彫ておさめけりと、菩提所ををさめ、その本尊これなり、観世音
こゝより川を越のときに、その船をわたらしとして、このりの岸まで結び
し、其のりやうへ十人の中まで、今は実子まで代々相続すと云

大川橋 あづまばしとも云

浅草川戸材木町のきはより、本所中之郷へわたす、この橋長さ八十四間、
六地蔵河岸といふ事、事跡合考に云、むかし八蔵が寛文の頃浅草川の
寺より観音へおさめまつるに、この船着町あり、其本の六地蔵石
灯篭地蔵よりの名このごの立場也、かさ志大ふところ并火袋くろく宝石
ともに一石にて、竿と云ふ石別石也、江戸砂子に云、続図会に改

寄せの語なりしより、慶安の頃にして十月二十二日出帰と云八字札、
ぼうなん又、悪事者中の名ある所は、年中其のるの木札の
ぼれるを禁ずべし

すみだ川わたりふねひいてつなぎ棄ぬとしてさえやむなきのふ　六樹園飯盛

短尺にしのぶ舟ておもし　隅田川　星飛びのしまる秋末の雲　後ノ蜀山人

雲の露あけのこゝろの　すみだ川　其の秋末のあつくあはれし、のべし　ともちんぬるに見ねずる足かまり　紀魚淵

都鳥君のこゝろのかひしらぬ又我すむや　川のすみだなん

砂尾汐入

柳には西日移さす水鶏かな　有月

厄除大師

かし持られ皆玉苗ぞ春の遊ひ　芋屋

今戸瓦竈

虫不立のけふ李紙休みに川遊ひ　大常

牛島黄檗

夜さくらや寺は女中の笑ひごゑ　素蕉

石濱古跡

畑中の錆の鎌拾や寒さ寸　青〻

小葉眺望

ゆふまぐれや衣の袂木の葉の散り　ちの各

小梅露径

橋のはしの露は歌の裏の秋声　少年 貞吉

盧崎秋葉

様のまれなるよそくめ〻のあき月　延年

寺嶋獨歩

しら鷺やすゝみ春の夜からまかな　草雨

雨中閑寂於梅屋囲碁

鶯やうしの聲と成し湯元寺の鐘え　雲明

橋場渡舟

草踏し足もとからかる扇の影　交二

待乳山夕陽

ちる紫蘇葉木の末より人影あらはれける　如谷

墨陀看花

三日蹊暄花作堆
長堤一路漲芳埃
白雲成洞武陵似
只恨世人相趂来

墨水雪渡

角太川即興

何ちてあれと月にさそはれて角田川に至れ
なかるゝも流れて様みえきて河原岸
若のいやまさる蔵のもとのあたり鐘
きこえゆるて潮さす鷗の翅音に
月すみわたりあそふやうなれ程まで桜井

右ゆくと霞むれやはるかにみゆるは浩洞
櫻見る人みなかへるや花古園無二木

水禽相喚倚寒沙
雪子攪空風子斜
玉笠瓊蓑渡江客
上番誰去問梅花
三五山老人

廬山書

秋露や草の流るゝすゝき川の萩垣
袷きてしまりて見えまする残暑の頃
、
さつきのよかなれハ桜ハ若葉松涼し柳儀
葉桜やとりとりの詩人の書画川雲に
、
まゐる川信夫志ぶ衣の人にまさ
木母寺のあたりときさや霞ヶ鳥谷雄
雲はみあたる桜の流るゝき一葉

、
小盲の先へうけ掛金のある板に御渡
船路をゆきせて舟とれ月見の菊馬佛
夕暮や春雨の名ならぬさまを法ふ図
ゆく里のこなたへ長き角田川ゆきて
来る鳥なるや綾瀬の級はゝ辞道
霧晴れつ中のおもひやるの中に草ちさき
山雪の坊のおもしろいきや川えさ
てんとまれぬ春や柳ありあまり中のちさき

花ならて海棠とも申さる古梅
家根ちまみれども枝葉の趣一具
吹さくのも悦も趣き谷河田の広義山
御手経る雨より淋し 岩する本筆ふ長臨
朝毎に萬歸尹指て 凡きるさの寒松

寒葉道人書